

現代ギリシア語における月の現れる諺 (2)

浮田 三郎

(日本ギリシア語ギリシア文学会 於 広島大学 2007年11月10日)

今回の発表は、前回の発表に続くもので、主に4月から12月までの諺の内容と特徴に関して考えてみた。

まず、春夏秋冬に分けて見ると、数の上からは、「春 68、夏 40、秋 13、冬 33」となり、春に関する諺が非常に多いことが分かる。そして、3、4月には、農耕、牧畜への準備を暗示するものが多く、取り分け恵みの雨に言及する諺が多いことが分かる。また、5月は、他に、「花月、花月、良月、緑月、バラ月、木太り月」などと、沢山の名前を持っており、春の終盤の5月は、序盤の雨の恵みを受けてその結果を暗示している。既に夏の様相も持っている。

次いで、夏が多いのは、7月8月と良い天気が続き、人々に好かれる季節であることが分かる。正に、*kalokairi* (良い時) である。また、暦の上では夏であるが、これらの月には、葡萄、穀物と収穫が行われ、重要な時期であることも分かる。したがって、秋に関する諺が少ないのは、このことと関係があであろう。すなわち、収穫の秋は、7、8月で終わっているのである。

また、収穫月の7月と8月の特徴をあげると、前者では、キュウリ、イチジク、葡萄、オリーブ、クルミ、亜麻、子羊、アヒルの子、など聖人プロコピス、マリナ、リアス、マリア、キリコス、などの聖誕祭との取り合わせで表現しているが、8月では、聖ソティラス、聖母、あるいは農夫、貧乏人などの取り合わせで、既に季節の変わり目を暗示する表現が現れている。そして、北風、冬の端にも言及が始まっている。

聖人祭に関しては、9月には、聖イオルゴス、聖ニキータ、10月には、聖ルーカス、聖ディミトリス、11月には、聖ミーナス、聖フィリポス、聖カテリーナの聖人祭に言及されている。さらに、7月に並んで聖人祭に多く言及されているのが、祝祭の月、12月である。聖バルバラ、聖サツパス、聖ニコラス、キリスト、聖アンドレアスが寒い12月を物語ってくれる。